

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 9. 総合研究大学院大学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009569">http://hdl.handle.net/10502/00009569</a>

# 9 総合研究大学院大学

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度な研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、日本文学研究専攻（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館に設置）の山下則子とその任にあたり、地域文化学専攻長は齋藤 晃、比較文化学専攻長は平井京之介が務めた。

## ●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2017年度、総研大は設立29年目を迎え、国立大学法人化14年目を迎えた。

総研大本部のある葉山キャンパスにおいて、入学式に続き、新入生を対象とする合宿型の集中講義「フレッシュマン・コース」が開催された。本年度は、地域文化学専攻から新入生2名が参加した。

文化科学研究科においては、かねてより連携強化が図られ、2005年度から文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して「総合日本文化研究実践教育プログラム」が2ヵ年実施された後、2007年度より「文化科学研究科連携事業」が始まり、民博に基盤を置く2専攻もこれに参加してきた。2017年度は、査読付き学術雑誌『総研大文化科学研究』第14号が刊行され、比較文化学専攻在籍生の論文2本が掲載された。また、「総研大文化フォーラム 2017 文化をくはかる——文化科学へのまなざし」が2017年12月2、3日に日本歴史研究専攻の基盤機関である国立歴史民俗博物館で開催され、地域文化学専攻の1年次生2名が学生企画委員として、その企画・準備・運営に携わった。さらに「学術資料マネジメント教育プログラム」として、文化科学研究科の各基盤機関が所蔵する学術資料を活用し、高度な知識と技術の習得ができる授業が開講されており、本年度は比較文化学専攻の岸上伸啓教授による「学術映像の基本」、園田直子教授による「資料保存学」が開講された。

第64回教授会（2017年9月15日）において比較文化学専攻から1名の課程博士、第65回教授会（2018年2月23日）において地域文化学専攻から1名の課程博士が承認された。

## ●教員の異動

2017年4月1日付で、林 勲男が教授に昇任した。

2018年1月1日付で、宇田川妙子、三尾 稔が教授に昇任した。

印東道子教授、横山廣子教授は民博定年退職、岸上伸啓教授は民博退職に伴い、2018年3月31日付で総研大教員の併任解除となった。なお、印東道子教授、横山廣子教授には総研大名誉教授の称号が授与された。

## ●学位の授与

### 【課程博士】

古沢ゆりあ（比較）『近現代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究』[文学]

〔審査委員〕園田直子、齋藤 晃、吉田憲司、後小路雅弘（九州大学大学院人文科学研究科 教授）、

岡田裕成（大阪大学文学研究科 教授）

### チャレンジアップ

喬 旦加布（地域）『中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究——同仁県ワッコル村を事例として』[文学]

〔審査委員〕野林厚志、南真木人、横山廣子、塚田誠之（総合研究大学院大学・国立民族学博物館 名誉教授）、大川謙作（日本大学文理学部中国語中国文化学科 准教授）

## ●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2018年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った126名の修了生および退学生のうち、合計68名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学18名、公立大学7名、私立大学33名、海外等その他の機関5名、民博2名、歴博1名、地球研1名、人間文化研究機構1名である。

## ●入学者選抜試験

2018年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻6名、比較文化学専攻5名、計11名の志願者があり、地域文

化学専攻 6名、比較文化学専攻 2名、計 8名の合格者を第65回教授会において決定し、7名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻 3名）に対する出願者の倍率は累計平均より低めの1.4倍であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

**【地域文化学専攻】**

植田めぐ美

「16、17世紀ブラジルにおける先住民による他者解釈——『カライーバ』とトゥピ語文献の分析を通して」  
（齋藤 晃、關 雄二）

田中伊佐生

「少数民族言語の保持と文化観光の関わり——中国湖南省の土家族を事例として」（野林厚志、菊澤律子）

松永千紗

「エスニックタウンの生存戦略——サンノゼ日本街における街の記憶と歴史の活用に着目して」  
（平井京之介、鈴木 紀）

紀 科安

「台湾鉄器時代における中部地域の集団文化の生成」（野林厚志、宇田川妙子）

胡 忠正

「現代社会における狩猟文化に見る変容——台湾原住民族のブヌン族を中心に」（野林厚志、齋藤玲子）

WURUGA

「都市に移住した牧民女性の生活変化とアイデンティティ——内モンゴル自治区バインノール市海流図鎮の事例から」（平井京之介、小長谷有紀）

**【比較文化学専攻】**

孫文

「近代中国の『藏羌彝走廊』における黒水人の地域アイデンティティの生成に関する研究——外部介入と開発に着目して」（鈴木 紀、卯田宗平）

2018年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学の内訳は、国立 2名、私立 1名、海外 4名で出身大学院の地方別では、中部、近畿、九州、海外となっている。

2017年度は、館内でオープンキャンパス（入試相談会／2000年度から開催）を9月21日に開催した。総研大および民博の概要説明、施設見学、在学生・修了生・教員との懇談会等が行われた。参加者は15名で東北、関東、中部、近畿、中国、四国、海外からと多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2017年度は比較文化学専攻の西山文愛、田村卓也、八木風輝、地域文化学専攻の那木加甫が日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用された。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻 教員数（2018年3月現在）

専攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	23
比較文化学専攻	1	23（基盤機関の長である民博館長を含む）

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2018年3月現在）

2018年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれ10名と16名、あわせて26名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて19名がいる。これは、教育研究の柱としている長期フィールドワークにそれぞれ出かけているためである。

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	3	0	7	10
比較文化学専攻	3	1	3	12	16

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991（平成3年）年度			1		1
1992（平成4年）年度					0
1993（平成5年）年度			1	1	2
1994（平成6年）年度	2		1		3
1995（平成7年）年度	2		1		3
1996（平成8年）年度		3			3
1997（平成9年）年度	3		4		7
1998（平成10年）年度	4	2			6
1999（平成11年）年度					0
2000（平成12年）年度	2		2	1	5
2001（平成13年）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14年）年度	1	1		2	4
2003（平成15年）年度					0
2004（平成16年）年度	2	3			5
2005（平成17年）年度	4	2		2	8
2006（平成18年）年度	2		3		5
2007（平成19年）年度	2	1	3		6
2008（平成20年）年度	1		1		2
2009（平成21年）年度		1	1	1	3
2010（平成22年）年度	2		2	3	7
2011（平成23年）年度	3		1	1	5
2012（平成24年）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25年）年度			1	1	2
2014（平成26年）年度	2	1	2		5
2015（平成27年）年度	3	1			4
2016（平成28年）年度	1	1	1		3
2017（平成29年）年度	1		1		2
計	39	18	29	14	100

